

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：34419

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K14093

研究課題名（和文）まちの資源としてのマイクロ・ライブラリーの実態と可能性に関する研究

研究課題名（英文）Study on Micro-Library as Town Resources

研究代表者

鈴木 毅（SUZUKI, Takeshi）

近畿大学・建築学部・教授

研究者番号：70206499

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：マイクロ・ライブラリー及び一箱古本市、ピブリオバトルなど本を用いた新しい活動に関する実態調査、読書会の実践から以下のことが明らかになった。1）個人が中心となって運営する個性的なライブラリーが広まりつつある。なかでも「まちライブラリー」は、簡易に地域に場をつくる仕掛けとして定着している。ただし規模、運営形態、活動は事例ごとに個別である。2）本は男女・年齢・職業などの属性を越えて、初めての人とも、いきなり深いコミュニケーションできる強い媒介性を持つ。3）この媒介性を利用して、ばらばらになった個人がつながるための有効な仕掛けとして本が再発見されつつある。

研究成果の概要（英文）：The following was revealed from the actual survey on new activities using books such as micro-library, One Box Second-hand Book Market, Bibrio Battle, and reading practice. 1) Micro-libraries operated mainly by individuals are spreading. Among them, "Machi-library" is established as a mechanism to create a place in the area easily. However, their scale, operation mode, and activities are individual for each case. 2) Beyond attributes such as gender, age, occupation, etc., the book has strong mediation that can be deeply communicated with suddenly for the first time. 3) Using this intermediacy, books are being rediscovered as effective tools for connecting individuals.

研究分野：建築計画

キーワード：マイクロライブラリー まちライブラリー 居場所 当事者 地域資源 媒介物 ピブリオバトル 一箱古本市

1. 研究開始当初の背景

(1) マイクロ・ライブラリーの登場と普及

近年図書館は大きな変革期にある(猪谷千香 2014)。地域の計画論の点から中でも興味深いのは、まちライブラリーなど、主として個人が運営する小さな図書館が全国に500以上誕生していることである。これらマイクロ・ライブラリーは、住居やカフェ、オフィス、寺等に開設され、蔵書数も数冊~数千冊と幅があるが実態は明らかになっていない。

(2) 計画住宅地に場を生み出す方法の不在

研究代表者はこれまで千里ニュータウンのコミュニティカフェでの調査研究を通じて、計画住宅地の問題は、社会的な接触の場が圧倒的に少ないこと、また、そういった社会的接触のある公的な性格の場を造り出す主体や仕掛けがないことだと考えてきた。こうした状況の中、個人が本を媒介にすることで、人々が集まり・交流する場をつくる仕組みとしてマイクロ・ライブラリーは大きな可能性があると考えるようになった。

2. 研究の目的

本研究は、近年全国に誕生しつつある、マイクロ・ライブラリー、及び読書会やビブリオバトルなど本を利用した活動を対象とした実態調査、更に千里ニュータウンにおけるライブラリーの設置実験を通じて、個人あるいは小グループが、地域の中に、自由な利用・交流などオープンで公的な性格の場を開設・運営している実態を明らかにするとともに、図書を媒介とすることによって、地域とりわけ計画住宅地の中に様々な属性の人々が参加交流可能なパブリックな場を造り出す方法論を提案することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) マイクロ・ライブラリーの実態調査

まちライブラリーおよびマイクロ・ライブラリーの基礎調査を行ったのち、現地訪問して主催者にインタビューを実施し、運営・活動実態を明らかにする(調査項目: 開設の背景・動機、建物種別、図書の冊数と種類、開館日、貸し出し規程、利用状況、利用者属性、開設時からの変化、イベント等の活動)。

(2) マイクロ・ライブラリーの設置実験

千里ニュータウンのコミュニティカフェ「さたけん家」(吹田市佐竹台近隣センター、アカデミー書房内)にまちライブラリーを設置する。またライブラリーを利用した読書会を開催し、地域活動としての意味を検証する。

(3) 本を用いた新しい場作りに関する調査

研究を進める中でマイクロ・ライブラリーの周辺活動として重要性が明らかになってきた、一箱古本市、ビブリオバトルなど、近年始まった本を使った注目すべき活動の実態について調査する。

4. 研究成果

(1) まちライブラリーの実態

まちライブラリーは本を媒介に人々が出会い交流することを目的に磯井純充氏によって提唱されたマイクロ・ライブラリー活動の1つである。住居、カフェ、オフィス、病院等の一角に本棚や図書施設を設置し、個人、小グループによってあらゆる場所で様々なまちライブラリーが開設、運営されている。

2011年に大阪で、最初のまちライブラリーが開設されてから、わずか5年で360件以上のまちライブラリーが全国に誕生している(表1)。

表1 まちライブラリーのあゆみ

2011年	10月	まちライブラリー第一号「ISまちライブラリー」が大阪天満橋に開設
2012年	1月	ISまちライブラリーと天満橋ビブリオバトルの共同ビブリオバトルイベントを開催
	4月	まちライブラリーのサテライト「まちライブラリー@大阪府立大学」が開設
	8月	第1回マイクロ・ライブラリー・サミットをまちライブラリー@大阪府立大学で開催
		グッドデザイン賞2013 受賞 Library of Year 2013 受賞
2012~2013年の間に東京、大阪にそれぞれ10のまちライブラリーが開設		
2013年	4月	本のリレー会「だいたい満月に」が大阪の3件のまちライブラリー間で始まる
	5月	「マイクロ・ライブラリー図鑑」発刊
	8月	第2回マイクロ・ライブラリー・サミットをまちライブラリー@大阪府立大学で開催
		マイクロ・ライブラリー憲章の制定
2014年で全国に120のまちライブラリーが開設		
2014年	1月	「本で人をつなぐ まちライブラリーのつくりかた」発刊
		市民参加型のまちライブラリー@森ノ宮Q'sモールが開設
	1月	OSAKA BOOK FESTA+2015を1ヶ月間開催
		「だいたい満月に」の会場がまちライブラリー@森ノ宮Q'sモールで開催
		「だいたい満月に」にまちライブラリー@森ノ宮Q'sモールが加入・主催に
2015年	10月	第3回マイクロ・ライブラリー・サミット開催
	4月	まちライブラリーブックフェスタ2016in関西を1ヶ月間開催
	12月	ビブリオバトルシンポジウムin大阪をまちライブラリー@森ノ宮Q'sモールで開催
2016年		日本最大のまちライブラリー、まちライブラリー@千歳タウンプラザが開設

関西と首都圏のまちライブラリーの調査から以下のことが明らかになった。

- ・極めて簡易な手続きで地域に本のある場をつくるフォーマットとしてまちライブラリーの仕組みは定着している。
- ・運営内容、図書館としての規模、活動の活発度は事例ごとにより異なっている。
- ・開催されるイベントの内容をみると必ずしも本にこだわっていないものも少なくない。
- ・本を提供する図書館機能よりも、人と人をつなぎ、地域に「顔の見える関係」を生み出すことを優先している場合が多い。
- ・元々なんらかの地域活動・場作りを進めていた主体が、その手段の一つとして、まちライブラリーを始めたケースがかなりあり、この場合運営も活発である(図1)。



図1 リエゾンサロン北越谷(藤田歯科医院)

(2) まちライブラリーのネットワーク活動

まちライブラリーの活動として注目すべきは複数のライブラリーが連携する活動である。中でも「だいたい満月に」は、共通の問題意識や目標を持った大阪の3件のまちライブラリーが2014年に連携して始めた本をリレーする形式の活動で、2015年よりみやQsモールが主催者として加入し、現在は4つのまちライブラリーで運営を再スタートした(2016年で一旦終了)。

参加者(男女、年齢、職業など属性は様々である)は一人一冊テーマに合う紹介したい本を持参し、順番に書籍の内容や本を読んだ動機、感想などを発表する。自ら読んだ本を紹介することで発表者の興味や価値観、人柄を本によって示す。全員の発表後に自分が読みたい一冊を指名し持ち帰って次回の満月の会で読書後の感想を共有する。二人以上が同じ本を指名した場合は、どうしてその本を読みたいかという内容を再度説明してもらい、多数決によって本を持ち帰る権利がある人物を決定する。満月の会では参加者全員が本の発表をする役割と発表を聞く両方の役割を持ち、本の紹介を通じて他者との相互理解を深めている。持ち帰る本を指名して選ぶ作業は、ゲーム感覚の競争的な仕組みであり、本を介して他者に評価してもらう機会があることで参加者がより活動に積極的になる効果がある。

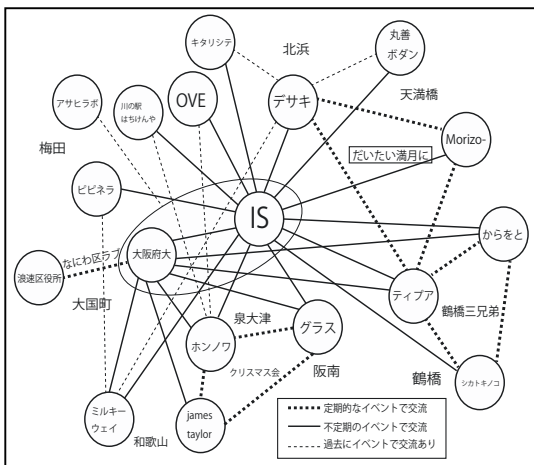


図2 大阪のまちライブラリーの連携

(3) マイクロ・ライブラリーの事例

訪問した中で最も興味深かったマイクロ・ライブラリーは、東京のあきるの市「少女まんが館」である。主催者は、日本の少女漫画が女性の創作物として世界的にも貴重なものであることに気づき、保管されにくい雑誌(付録も含め)を中心とする図書館を開くことを決意し、専用の建物を建て運営している。賛同者からの寄贈本にも助けられているが行政等からは全く援助を受けていない。土曜日の午後だけの開館であるが、全国、時には海外からも利用者が訪れ、満足して帰っていくという。



図3 少女まんが館(東京都あきるの市)

(4) 古本に関する新しい活動

マイクロ・ライブラリーに関する調査を進めるうちに、近年古本をめぐっても注目すべき新しい動向・活動があることがわかった。その代表は南陀楼綾繁氏によって提唱され2005年に上野で始まった「一箱古本市」である。その名のとおり一般の人が、箱に入る分の古本を街路の軒先に並べて開催される古本市で全国各地に広まっている。我々も2015年9月に「あじはら一箱古本市」(図4)に実験的に参加し、以下のような知見を得た。

- ・手近の数冊の本を並べるだけでよいので、街に店を開く敷居が圧倒的に低い。
- ・古本の選び方で個性を出すことも可能。
- ・並んだ古本を媒介にお客や店主どうして活発なコミュニケーションが発生する。
- ・特に本を話題にすることで、初対面の人と「いきなり深い会話」をすることができる。



図4 あじはら一箱古本市にて

古本屋は昔からある業態だが、最近では若い世代による新しいタイプの古本屋も登場しており、複数店が連携したイベントも開催され新しい地域活動として注目できる(図5)。



図5 瀬戸内ブッククルーズ(岡山大学 Jテラスカフェ)

(5) さたけん家読書会の実験より

千里ニュータウンの佐竹台近隣センターに開いた「まちライブラリー@さたけん家」において6回の読書会を開催した(カズオ・イシグロ、村上春樹、西加奈子等の著書を題材)。この運営と記録された会話の分析から以下のようなことが明らかになった(図6)。

- ・本を媒介とすることで年齢・性別・職業等属性を越えたコミュニケーションが可能
- ・同時に、属性や個人特有のものの見方の違いを認識することもできる。
- ・本の読み込みを元にする議論から初対面の人も深いコミュニケーションができる。

教員 男性
皆が同じ作家の本を持ち寄るが、読み手によって、本に付箋や線をつける箇所が違うことに驚いた。それぞれの意見を聞くと、ひとりて読んだときには注目していなかった面白い発見が得られるのは読書会の醍醐味。

主婦 女性
職業が異なる人、自分の子供と同じ世代、出身地の違う人など読書会に参加していなければ出会えなかった人達と、一つの作品について語り合うのはとても刺激的である。テーマ本を皆で囲めば、初対面の人とも、知的で深い意見を交換・共有できるので本当に楽しい。

図書館勤務 女性
読書会に参加するまでは、まちにこんなにも本を上手に読める人達がたくさんいることを知らなかった。それぞれが事前に本を汚して(付箋付や線引など)、作品をしっかりと読み込んでいるのを見ると、熱意や楽しさが伝わってくる。聞き手でも発言者でも色んな役割で楽しめる。

カフェ利用者 女性
何気なく発言した言葉にも共感や反応してもらえたときは嬉しかった。ひとりて抱えていた疑問が仲間との議論を通じて解決したり、視点を変えて作品について考え直すきっかけやヒントを教えてもらえる。顔合わせで様々な人達と本や読書を楽しめるのはこの場ならではの。小さな読書界であるが、議論の質は非常に高く、価値のある意見に触れることができるので好奇心がくすぐられる。

図6 さたけん家読書会の記録・インタビューより

(6) ビブリオバトルに関する調査

ビブリオバトルは谷口忠大氏によって提唱された本の紹介を競うイベントである。発表者は各自5分間で推薦する本を紹介して、聴衆が最も読みたいと思った本がチャンプ本として表彰される。始まってまだわずか10年だが、街の各所、図書館などで普及し全国大会も開かれている。関西では毎週一回はどこかで開催されており全てはしごして参加する人も少なくない。参加者は幅広いが、特に知的な男性にとっての貴重な街の居場所として意義があるように思われる(図7)。

ビブリオバトル 倶楽部員 男性
通りがかりの人にも気軽に親戦してほしいので、図書館の入口に近い1階のロビーがビブリオバトルの会場に向いていると思う。人の行き交いがある環境だと、オープンな会場になり、色んな人が立ち止まってバトルを親戦してくれる。定期的開催することで、ビブリオバトルを楽しみに図書館に来る人が増えてほしい。

60代参加者 男性
ビブリオバトルはゲーム性がある面白。読書会も好きではあるが、ビブリオバトルは勝ちを決める(チャンプ本を決める)から、挑戦する甲斐がある。自由な老後に、本を通じて色んな人と交流できる機会があって楽しい。

ビブリオバトル 倶楽部員 女性
コミュニケーションカードは堺市図書館のビブリオバトル、オリジナルの提案。紹介して終わり、聞いて終わりのビブリオバトルは少し味気ない。参加した記録が溜まっていくのは面白いはず。カードは参加すればもらえるコレクションのような感じで楽しんでもらえると思う。

図書館司書 女性
図書館の予算は限られているのでビブリオバトルの運営も工夫が必要。現状維持だけではなく、より良く変えていく提案を倶楽部の方々と協力しながら挑戦している。ビブリオバトルで紹介された本をきっかけに、本棚で眠っている本を利用者の方が手にとってくれたらうれしい。

図7 ビブリオバトル参加者の記録・インタビューより

(7) まとめ：本を媒介とした場作り

□マイクロ・ライブラリーの実態

各地に個人が中心となって運営する個人的なマイクロ・ライブラリーが広まりつつある。なかでも「まちライブラリー」は、簡易に地域に場をつくる、あるいは既にある場の活動を補強する仕掛けとして定着している。ただしその規模、運営形態、活動はライブラリーごとに個別であり、必ずしも本を中心にしていないケースもある。

□本の持つ強い媒介性

本は、男女・年齢・職業などの属性を越えて、初めての人とも、いきなり深いコミュニケーションできるという強い媒介性を持つ。このため従来地域づくりの仕掛けとして一般的であったコミュニティカフェ(男性は参加しにくい)やアート(話題とする議論が難しい)を越えた仕掛けとなるポテンシャルがあり、実際に利用されつつある。

□人がつながる仕掛けとしての本

これまで本・読書は個人的な活動と位置づけられてきた。しかし、一箱古本市(2005)、ビブリオバトル(2007)、まちライブラリー(2011)と、本を用いて人が関わる新しい活動・仕組みが全国に急速に普及しつつある。西川祐子氏は「かつては公があつての私だったが、現在の私たちが求めているのは私から編み上げる他者との直接的な関係性ではないか」と語っている。このための手段として、すなわち、ばらばらになった個人がつながるための有効な媒介物として本が再発見されつつある。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

1. 古矢千晶、鈴木毅、まちライブラリーの相互交流とネットワーク形成に関する研究、人間・環境学会、第22回大会、2015
2. 鈴木毅、MERAライブラリー:もの(本)を媒介とした場の形成、人間・環境学会、第23回大会、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木毅 (SUZUKI, Takeshi)
近畿大学・建築学部・教授
研究者番号: 70206499

(2) 研究分担者

吉住優子 (YOSHIZUMI, Yuko)
帝塚山大学・現代生活学部・非常勤講師
研究者番号: 60571180

(3) 研究協力者

古矢千晶 (FURUYA, Chiaki)
山本真樹 (YAMAMOTO, Aki)